

林文子先生を偲んで

小坂 てる

丁度名残りの季節を迎えた頃、私達は林文子先生がお亡くなりになられたことを知りました。少し前から御病気とは伺っておりましたがあまりに急なこと、おどろきと悲しみで胸のふさがる思いでございます。先生と御交際させていただき30年間の出来事が次から次へと昨日のように思い出され、とても信じられない気持ちでございます。先生との最初の出会いは昭和三十八年晩秋の頃、小坂ビルが出来上がりその初めての入居者が林先生でございました。女のお医者様であるとお聞きし田舎者の私は少し眞れを感じていたのですが、お会いしてみますと小柄で愛らしくその上、気さくにお話してくださいましたのですっかり親しみをもってしまいました。喜怒哀楽のはっきりした方で私の家へも時々きて下さり色々なお話を聞かせて下さり時には泣いたり笑ったりそして一緒に食事をしたり、本当に親密に交際させていただきました。私達家族は先生とお近づきになりましたおかげで、言葉に表せない程数々の御恩を受けることとなりました。末娘には良い縁談をお世話いただきました。そしてその娘が胃の病気となり静岡の病院で手術を受けましたが先生はわざわざ立ち会って下さり、私達もどんなに安心したことでしょうか、主人が名大病院に入院する際には色々とお配慮下さり毎日の様に「社長さん、社長さん」と手をさしのべて握手をして下さいましたが主人は涙を流して握り返し喜んでおりました。楽しかった思い出の一つとして先生と私とは一緒に茶ノ湯と生花の勉強を致しましたが何事もすじみちを立てて理解なさりお花も大変繊細で優美な活け方で目を見張ったこととございます。先生は放射線医学の権威者とおききしておりましたが一方ではこのような女性らしさも、もっておられました。又世間の物事に対しても正しい考え方を持っておられましたので私を始め嫁たちにも色々とおアドバイスをして下さいましたが、先生は本当に私達にとってなくてはならない存在だったと今更ながらつくづく思い出されます。最後に今から思い起こしますと先生がお亡くなりになる一ヶ月程前に私の娘や嫁達はそれぞれにネックレスとか指輪を一つずついただきました。きっと形見として下さったのではないのでしょうか、先生の胸中を推しはかり唯々涙があふれるばかりでございませぬ。有り難うございました。先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。